
大学運動部の集団凝集性

富永徳幸, 田口節芳

Group cohesiveness of sport club in the university

Noriyuki TOMINAGA, Setsuyoshi TAGUCHI

1. 緒言

我々の身近には、家族・学級・各種サークル・友人の集まり・職場の同僚などの集団が存在する。これら集団内の成員間にみられる相互作用は、個人では成し得ないことを可能にする。集団がまとまっている、成員同士の気が合っている、統制がとれている、などを表すために集団凝集性という概念が用いられている。¹⁾ スポーツ場面も例外ではない。学生の集団的スポーツ²⁾ (バスケットボール) 指導の現場において、個々の能力は優れていても、チームとしては必ずしも望んだ試合結果 (パフォーマンス) に直結しない事例が数多く体験される。そこに技術水準以外の要因が介在することは想像に難くない。例えば、「チームの業績を高めること、練習効果をあげること、試合で良い成績を収めることなどは、チームの凝集性やモラルとは切り離すことのできない関係にある」²⁾ といった指摘が従来からなされている。チームの凝集性はいかにして高めることができるのか。換言すれば、凝集性とは何か、また何に影響されるのか。指導者はこれらの問題に無関心ではいられない。

以上のような関心から、本論では、大学運動部の集団凝集性を構成する因子を探るとともに、凝集性と関連する変数について検討を試みた。

2. 方法

2.1 諸概念

①運動集団

人間は、家族をはじめ生活の大部分を集団状況下で過ごしている。社会学小辞典によれば、集団は「一般的に複数行為者の相互行為や相互関係に規則性と持続性がみられ、ある程度共通の志向が分有されている場合を指し、①共通の目標ないし関心、②地位や役割の分化、③規範または行為準則、④われわれ意識ないし共属意識などの存在を特徴とし、それらが成員間の相互行為や相互関係の規則性・持続性・安定性・凝集性を保障する」⁴⁾と定義されている。

一方、運動集団は、運動することを活動目的とした機能集団であると言える。本論では大学における運動集団をいわゆる運動部と捉えた。即ち「スポーツ活動を目的とした個人の集まりで、部としての共有の目標をもち、その目標達成のために、運動の練習を行っている比較的永続的で活動的な集団である」⁵⁾と定義する。

②集団凝集性

集団の凝集性については、一般にフェスティンガーによる「集団成員が集団に止まるように働きかける全体的な場の力」⁶⁾という概念規定が用いられている。集団の凝集性とは、集団の他の成員の魅力・集団目標や課題の魅力・集団帰属による威信といった、成員が集団に対してもっている魅力である⁷⁾といえる。本論では集団凝集性を「集団成員を集団に引き止める力の程度、あるいは成員間のまとまりの程度」と定義する。

2.2 分析の視点及び仮説

2.2.1 分析の視点

丹羽は凝集性の要因（たとえば集団成員の魅力、集団活動の持つ魅力、集団に所属することによって得られる利得など）を規定し、それを合成するような凝集性尺度による質問紙⁸⁾を作成した。本論では、丹羽の作成した成員性検査項目を援用する。また、凝集性を規定する諸要因を探るとともに、それらに影響を及ぼす変数として次の3点に着目した。

①学年による差異

大学の運動部においては通常、上級学年ほど在部期間が長い。従ってその期間に形成される人間関係や部の集団機能への順応などが下級学年に比較して強いものと思われる。また上級学年になるにつれ、先輩としての自覚を持つようになると推測される。このことは、凝集性の高まりに何らかの関連があると考えられる。

②試合への出場頻度による差異

試合に出場できるということは選手としてのモチベーションを高める要因である。従って常時試合に出場する部員は部の代表として凝集性も高いことが推測される。ここでは、常時試合に出場できる部員を「レギュラー」とし、時々出場する部員を「準レギュラー」、殆ど出場する機会のない部員と出場経験のない部員を「ノンレギュラー」とした。

③部内での役割の有無による差異

大学の運動部内には様々な役割がある。主将、副主将をはじめ主務（マネージャー）を任されることで、部の運営を支えようとする自覚が生まれることが推測される。部内での役割は、凝集性の高まりと何らかの関連があると思われる。ここでは、部内で何らかの役割を持っていることを「役割あり」とし、役割を持っていないことを「役割なし」とした。

2.2.2 仮説

前述の内容を踏まえて、本研究では以下の3点を仮説とした。

- (仮説1) 上級学年は下級学年より凝集性が高い。
- (仮説2) レギュラーは準、ノンレギュラーより凝集性が高い。
- (仮説3) 役割ありの部員は役割なしの部員よりも凝集性が高い。

2.3 分析の方法

2.3.1 調査

- ①調査方法 質問紙による集合調査法
- ②調査時期 平成13年12月2日及び平成17年11月21日
- ③調査対象 本学運動部（硬式野球・空手道・バスケットボール・ハンドボール・柔道・剣道）部員合計126名
- ④調査内容 成員性検査項目（表1）、学年、役割、出場頻度、競技歴

2.3.2 データの分析

本論では、丹羽の成員性検査項目を援用して凝集性を測定した。次に、因子分析によって凝集性を規定する要因を抽出することを試みた。さらに、抽出された因子による因子得点を変数（学年、出場頻度、役割）ごとに比較し、凝集性との関連性を検討した。なお、データ分析にあたっては、SPSS 12.0J for Windows を用いた。

表1 成員性検査項目

-
1. 試合に行って時間を費やすのが惜しいと感じることがありますか。
 2. 試験前や宿題のある時などに試合がある場合、苦になって試合に行きたくないと思うことがありますか。
 3. 練習や試合のために費用がかかって惜しいと思うことがありますか。
 4. 練習や試合などで非常に体が疲れていやになることはありませんか。
 5. 部の雰囲気や人間関係がいやで、やめたいと思うことがありますか。
 6. 「部の活動のため勉強ができなくなる」と不安に思うことがありますか。
 7. 部に入っていると将来のために良くないと思うことがありますか。
 8. 部の決まりや約束をあなたはどの程度守っていますか。
 9. 今の部に入っていることを部員以外の友達の前で口に出すとき、どのように感じますか。
 10. 部員以外の人から部員の悪口を言われたら、どんな気がしますか。
 11. 他の人にも今の自分の部に入ることをすすめたいと思いますか。
 12. 今の部の活動や、部の生活の状態についてどう思いますか。
 13. 両親があなたの部活動に反対したらどうしようと思いますか。
 14. 今の部の進もうとしている方向や目標をどの程度支持しますか。
 15. 長い練習休み明けのとき、練習の始まりをどう思いますか。
 16. 転校したとしたら、同じ様な部に入りたいと思いますか。
 17. 今の部にいつまでもいたいと思いますか。
 18. よい部というのは、部員の協力によって活動が活発であり雰囲気も明るく、部活動に生きがいを感じるような魅力ある部であるとしたとき、今のあなたの入っている部はどのような状態だと思いますか。
 19. 何かの用事で部の練習に出られない時、どう思いますか。
 20. 大事な試合当日、親戚の結婚式に招待されたとしたら、あなたはどうしますか。
-

3. 結果および考察

3.1 成員性検査による凝集性の測定と各変数との関連性（換算得点による）

成員性検査では、5段階尺度で得られたデータから、換算表（表2参照）に従って凝集性（全体）得点が算出される。表3は算出された凝集性得点を変数（学年、出場頻度、役割）ごとにまとめ、差異を示したものである。一元配置分散分析によれば、学年 ($F(3, 120)=6.62, p < .01$)、出場頻度 ($F(3, 120)=5.55, p < .01$)、役割 ($F(2, 120)=5.17, p < .05$) に有意差が認められた。

さらに、多重比較によれば、学年間、出場頻度間の差異は有意(いずれも $p < .05$)であった。即ち、上級学年が下級学年より、レギュラーがノンレギュラーより、役割がある部員が役割なしの部員より凝集性が高いことが示唆された。これらの結果は仮説1、2、3を支持するものである。

凝集性に影響すると思われる変数は様々に考えられる。例えば、阿江（1985）は集団の志向（競技志向－レクリエーション志向）と凝集性との関係を検討している。⁹⁾ 本論では、種目による特性（個人競技と集団競技）を特に限定せずに、調査対象者を大学運動部員とした。スポーツ種目（集団、個人等）、集団の志向、競技レベル（能力水準）といった変数を考慮した吟味が望まれる。

表2 項目換算表(丹羽1968による)

番号	5	4	3	2	1	番号	5	4	3	2	1
1	0	7	16	24	34	11	34	24	16	7	0
2	0	8	18	26	36	12	43	30	19	9	0
3	0	7	15	23	33	13	32	20	13	7	0
4	0	10	20	30	40	14	33	21	13	7	0
5	0	8	16	25	36	15	33	23	16	9	0
6	0	3	16	24	34	16	33	23	16	8	0
7	0	6	12	19	32	17	36	23	14	6	0
8	0	11	22	31	41	18	40	28	18	9	0
9	0	7	18	27	36	19	36	25	16	8	0
10	0	9	15	22	34	20	32	21	13	0	0

表3 各変数の凝集性得点比較 (全体) N = 120

		平均	±	S. D.	F値	多重比較 (Bonferroni 5%水準)
学年	1年	74.66	±	21.75	6.62 **	3 > 1, 2
	2年	75.68	±	25.51		
	3年	91.01	±	19.20		
出場頻度	R	90.47	±	23.26	5.55 **	R > SR, NR
	SR	77.30	±	19.34		
	NR	74.76	±	23.64		
役割	あり	84.76	±	24.64	5.17 *	あり > なし
	なし	75.23	±	20.88		

(役割については2群比較のためF値に従う)

R	: レギュラー	** P < .01
SR	: 準レギュラー	* P < .05
NR	: ノンレギュラー	

3.2 因子分析による凝集性の構成要因 (因子) と各変数との関連性

3.2.1 凝集性の構成要因 (因子)

凝集性がどのような要因 (因子) で構成されているかについて、因子分析 (主因子法) によって抽出を試みた。対象項目は成員性検査項目 (5段階尺度) であった。^(注2) その結果、固有値 1.00 以上で 4 因子が抽出された。回転後の因子負荷量 (バリマックス法) は表4に示した。

第1因子に高い因子負荷量を示したのは、項目 11、12、13、15、16、17、18 の7項目で、その内容から「部への愛着」因子と解釈された。第2因子に高い因子負荷量を示したのは、項目 5、7、9、10 の4項目で、その内容から「部との同一化」因子と解釈された。第3因子に高い因子負荷量を示したのは、1、2、3、4、6 の5項目で、その内容から「部優先への抵抗感」因子と解釈された。第4因子に高い因子負荷量を示したのは、14、19、20 の3項目で、その内容から「部への賛同」因子と解釈された。

表4 回転後の因子負荷量
(主因子法、バリマックス回転)

		F1	F2	F3	F4
項目	17	.684			
	16	.674			
	18	.626			
	12	.613			
	11	.573			
	15	.543			
	13	.487			
	7		.681		
	9		.594		
	10		.586		
	5		.572		
	3			.740	
	2			.620	
	4			.551	
	6			.477	
	1			.455	
	14				.811
	19				.509
	20				.452
固有値		3.093	2.508	2.372	1.537
寄与率 (%)		16.3	13.2	12.5	8.1

3.2.2 凝集性の構成因子と各変数（学年、出場頻度、役割）との関連性

因子得点を算出し、各因子と各変数との関連性検を検討した。因子得点の変数別平均は表5に、因子得点の変数別比較は表6に示した。

一元配置分散分析によれば、第1因子(部への愛着)では、学年($F(3, 120)=4.69$, $p < .05$)、出場頻度($F(3, 120)=2.77$, $p < .05$)において有意差が認められた。第3因子(部優先への抵抗感)では、学年($F(3, 120)=3.65$, $p < .05$)、出場頻度($F(3, 120)=3.75$, $p < .05$)、役割($F(2, 120)=7.75$, $p < .01$)において有意差が認められた。さらに、多重比較によれば、第1因子では3年生が2年生より、レギュラーが準レギュラーより、有意($p < .05$)に高かった。また第3因子では3年生が2年生、1年生より、レギュラーがノンレギュラーより有意($p < .05$)に低かった。第2および第4因子について有意差は認められなかった。即ち、上級学年あるいはレギュラーは「部への愛着」が強く、上級学年、レギュラー、役割ありの部員は「部優先への抵抗感」が弱いことが示唆された。

表5 因子得点の平均値

	N	F1		F2		F3		F4	
		平均	± S. D.	平均	± S. D.	平均	± S. D.	平均	± S. D.
学 年	1年 (44)	.042	± .841	.128	± .922	.270	± .851	-.113	± .910
	2年 (38)	-.328	± .948	.037	± .689	-.109	± .819	-.108	± .861
	3年 (38)	.280	± .830	-.186	± .926	-.203	± .864	.239	± .878
出場頻度	R (36)	.271	± .841	-.162	± .698	-.290	± .967	-.084	± 1.063
	SR (32)	-.221	± .662	.026	± .777	-.017	± .804	.118	± .726
	NR (52)	-.052	± 1.025	.096	± .999	.211	± .775	-.015	± .864
役 割	あり (62)	.001	± .892	-.065	± .886	-.206	± .823	-.001	± .748
	なし (58)	-.001	± .916	.069	± .832	.221	± .858	.001	± 1.030

F1 : 部への愛着
 F2 : 部との同一化
 F3 : 部優先への抵抗感
 F4 : 部への賛同
 R : レギュラー
 SR : 準レギュラー
 NR : ノンレギュラー

表6 因子得点の平均比較

	学 年		出 場 頻 度		役 割
	F値	多重比較	F値	多重比較	F値
F1	4.693 *	3 > 2	2.766 *	R > SR	.000
F2	1.422		.982		.732
F3	3.651 *	1, 2 > 3	3.754 *	NR > R	7.749 ** なし > あり
F4	2.026		.441		.000

** p < .01 * p < .05

F1 : 部への愛着 1 : 1年 R : レギュラー
 F2 : 部との同一化 2 : 2年 SR : 準レギュラー
 F3 : 部優先への抵抗感 3 : 3年 NR : ノンレギュラー
 F4 : 部への賛同

(多重比較はBonferroni 5%水準)

(役割は2群比較のためF値に従う)

凝集性の換算得点では学年、出場頻度、部内の役割といった変数によって有意差が認められた(前述3.2.1)ものの、因子分析によって抽出された因子では、2因子に有意差が認められたにとどまった。従って、凝集性の高低は「部への愛着」「部優先への抵抗感」の差異に表れたと推測される。当然ながら、これは本論が想定した変数との関連性に限定されることであり、他の変数との関連性を検討することが望まれる。また、同時に凝集性を構成する因子についても更に検討をすべきであろう。

4. 結語

本論では、大学運動部の集団凝集性を構成する因子を探るとともに、凝集性と関連する変数について検討を試みた。まず、成員性検査項目（丹羽、1968）を採用した質問紙によりデータを収集し、換算された項目得点から凝集性が測定された。そして学年、出場頻度、部内の役割の有無といった変数と凝集性との関わりが検討された。更に因子分析によって、凝集性を構成する4因子が抽出され、各因子と前述の変数との関連性が検討された。

その結果、以下のことが明らかとなった。

(1) 換算得点による分析では、上級学年が下級学年より、レギュラーがノンレギュラーより、役割がある部員が役割なしの部員より凝集性が高いことが示唆された。即ち、仮説1、2、3はそれぞれ支持された。

(2) 凝集性を構成する因子として「部への愛着」「部との同一化」「部優先への抵抗感」「部への賛同」の4因子が抽出された。

(3) 因子得点による分析では、4因子のうち「部への愛着」「部優先への抵抗感」に関してのみ、学年、出場頻度、部内の役割による有意差が認められた。

今後の検討課題は次のように整理された。

(1) スポーツ種目（集団、個人等）、集団の志向、競技レベル（能力水準）などの変数との関連性の検討

(2) 凝集性測定項目の再吟味

(3) 凝集性を構成する因子の再検討

「注」

- 1) 運動種目の分類は、それぞれの目的に応じてなされている。例えば、運動を成立させる基本条件としての人間関係に着目した、個人的種目・对人的種目・団体的（集团的）種目の分類がそれである。³⁾
- 2) 20項目による因子分析では、項目番号8の因子抽出後の共通性が低かったため、分析から除外し、再度19項目による因子分析を行なった。

「参考文献」

- 1) 東山千鶴子・丹羽劭昭・森岡美智、集団凝集性の概念および研究の概観、大段員美・竹内京一・丹羽劭昭（編）、体育集団の研究、タイム社、295-317、1972
- 2) 松田岩男、体育心理学、大修館書店、365、1980
- 3) 宇土正彦、運動の分類論、岸野雄三・松田岩男・宇土正彦（編）、序説運動学、現代保健体育学体系 9、大修館、79、1968
- 4) 濱島朗他、社会学小辞典、有斐閣、1984、179
- 5) 竹村昭・丹羽劭昭、運動部のモラルの研究（1）、体育学研究、12、77-83、1967
- 6) Festinger, L., Schachter, S. & Back, K.: "Social Pressures in Informal Groups." Harper, 1950
- 7) 前出 2)、357-358
- 8) 丹羽劭昭、運動部員の成員性検査の作成、体育学研究、13、1、13-20、1968
- 9) 阿江恵美子、集団凝集性と集団志向の関係および集団凝集性の試合成績への効果、体育学研究、29、4、315-323、1985